

情報グループ

研究協力者	平成 15～18 年度	チャレンジキッズ研究会
	平成 19 年度	川井 久也（石川県立総合養護学校教諭）
	平成 19 年度	島田 勝浩（石川県立明和養護学校教諭）

1. グループの概要

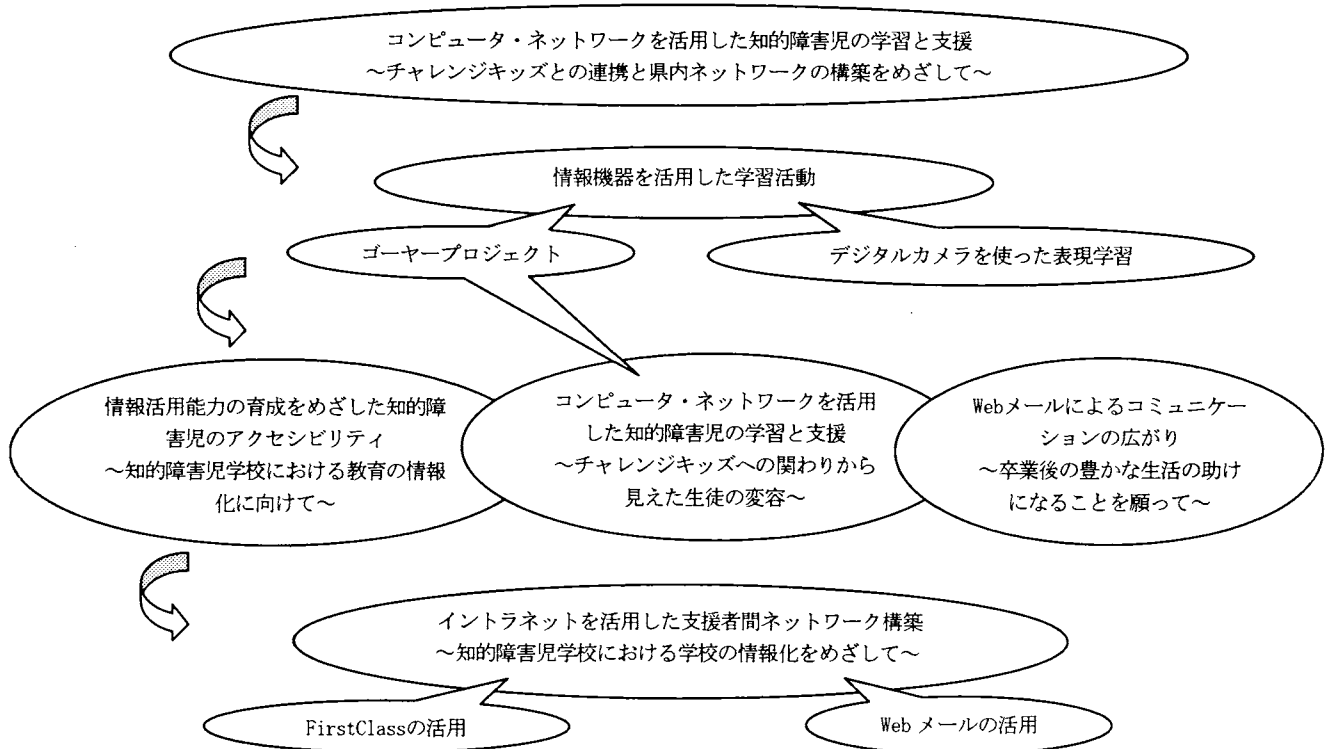
情報グループは、チャレンジキッズ研究会¹と連携し、そこで学んだことを生かし、またその発展をめざして、～児童生徒の「学習の場」の拡がり求めて～、～支援者の効果的な連携をめざして～を柱にして立ち上がった。

児童生徒の学習の支援という点で実践を重ねながら、同時にネットワークを使用することに限らず情報機器をいかに児童生徒の学習の支援に活用できるかといった観点でも研究がなされた。

昨年度からは、支援者間ネットワーク構築の可能性に焦点をしばって取り組み、チャレンジキッズでも使用されているFirstClass²の会議室を利用する方法や、Webメールを活用する方法での実践を行った。

このように、生徒・教師間のコミュニケーションから、学校間、支援者間と、さまざまな切り口から、情報機器を活用したコミュニケーションについて研究してきた。

< 研究の流れ >



2. これまでの研究について

本研究については、子どもの学習支援からの観点と、支援者の効果的な連携のためのシステムの構築という二つの観点で見ることができる。

(1) 児童生徒への学習支援の観点から

コンピュータをはじめとする情報機器を活用することで、生活の中に適切かつ有効に情報を取り入れ、活用していく力を身につけられるような学習活動の検討や、ネットワークの活用による子どもの表現方法を広げ、身近な人々や遠隔地の人々との情報交換やコミュニケーションを楽しみながら学習できる活動について実践・研究した。

チャレンジキッズの利用をはじめ、学習活動における入力デバイスと教材ソフトウェアの工夫や、Webメールを利用した情報活用などの研究が行われ、情報機器活用能力の異なる生徒たちに対する支援のあり方の実践が広げられた。適切な機器等の補助を受けることで情報へのアクセシビリティを向上させる研究やネットワークを活用したコミュニケーション支援をめざした研究では、情報活用能力の育成をめざした学習活動を展開することができ、さらにこれらの学習で育成された知識や技能は家庭生活や卒業後のQOLの向上にもつなげていくことができるものであった。

以下にその実践例を取り上げる。

①情報機器の活用に関して

デジタルカメラを使った表現学習の取り組みでは、画像そのものでの表現力だけでなく、ことばでの表現力を広げる学習をめざしたものとなった。

ゴーヤプロジェクトの取り組みでは、Web検索を行ったり、沖縄を含む各参加校が記録（写真やコメントなど）をWeb形式にまとめる形で発表会を行い、ネットワークを利用した交流学習、ネットワークを通してのコミュニケーションを学習する足がかりをつくることができた。

②情報活用能力の育成をめざした知的障害児のアクセシビリティに関して

障害のある子どもたちにとっての情報機器利用について、①障害の状態を補うための道具として、②効果的な学習を進めるための道具として、③社会生活を豊かにする参加メディアとしての3つ意義を掲げ、簡易入力デバイスのフィッティング、学習ソフトウェアの選定等を行い、これまでコンピュータに関心があったが経験がなかったり操作が難しかったりというような理由からほとんど活用することのなかった子どもに対しても、入力デバイスと教材ソフトウェアを工夫することで学習活動に取り入れることができた。

③コンピュータ・ネットワークを活用した知的障害児の学習と支援に関して

チャレンジキッズに参加することで学習に対する意欲やコミュニケーション面での成長を期待して取り組み、その過程と生徒に見られた変容に関して考察した。ここでは、電子メールを用いた1対1のやりとりではなく、参加するすべての人が見ることのできる電子掲示板のスタイルだからこそ生まれる学びの相互作用という成果を得られた。

④Webメールに関して

主に情報の受信源としているコンピュータを、Webメールを通して情報の発信源としても利用し、コンピュータリテラシーの向上を図ると共に、卒業後のQOLの向上を期待して取り組んだ。在学中には学校へ登校できない現場実習中に家からメールを発信して教師とつながりを持ち続けることができ、卒業後も日常的にWebメールを通しての交流が続いている卒業生がいる。

現在、メディアルームには数台のMacと10台のWindowsマシンが生徒に開放されており、

休み時間には生徒で一杯になるほど活用されている。生徒たちのコンピュータに対するアクセシビリティはとて高くなってきている。

(2) 支援者間ネットワーク構築の観点から

イントラネットを活用した支援者間の連携を考えるにおいて、チャレンジキッズで使用されている電子会議室システムFirstClassは、その実践事例からみてきわめて先進的で有効な手段であると考えた。FirstClassを活用することで得られる有効性を子どもの学習活動に生かすことに限定せず、子どもをとりまく支援者をつなぐネットワークとして活用していき、教育情報の共有化を図ることで広いエリア、長いスパンで子どもたちを支援するシステムの構築をめざした。現在の本校の取り組みの中でも教育相談事業・自立活動のケース検討・就労支援など幅広いネットワークづくりに可能性を見出すことができる。このことでイントラネットサーバを設置できる附属学校であるからこそその大きな存在意義を示すことができると考えた。

支援者間ネットワーク構築に関して、以下に2つのアプローチを取り上げる。

①FirstClassの活用に関して

FirstClassを活用した教師及び支援者間の連携、学校の情報化をめざした教育情報の共有化について実践を行った。本校のFirstClassサーバ上に、ある生徒に関係する特定の職員のみがアクセスできる部屋（電子会議室）を作成し、その生徒の自立支援に関しての情報交換を行うことができた。校内の事例を作るにとどまったが、それまでとは違った切り口でFirstClassを活用することができ、子どもを支える人たちのネットワークをハード面から支えていく道筋の一步を踏み出すことができた。

②Webメールの活用に関して

今年度は、支援者間の情報交換及び連携についてふたたびWebメールの活用を試み、ある条件下においてその有用性が発揮されることを再確認することができた。

研究対象としたのは、中学部3年生の生徒Aである。Aは自閉的傾向をもち、特定の物に強いこだわりをもっている。家でそのことに関してパニックを起こすことがあり、連絡帳でそのことを知らせようとしたり本人の前で情報交換をしようとする、それを察してパニックになることがあった。そのため、保護者と担任との間の情報交換の手段としてメールを利用することにした。

一度にやりとりする情報量が多いため携帯電話等は利用せず、経過を蓄積できる点やセキュリティ一面も考慮して、本校のメールサーバに登録したメールアドレスを使用した。メール交換の頻度は高く、また保護者からのメールは、Aが眠ってから（深夜）か、または学校に来ている時間（日中）しか送ってくるができない。そのため、こちらがどこにいてもなるべくリアルタイムで保護者からのメールを把握して返信できるようにするため、パソコンが固定されるメールソフトは利用せず、Webメールの形態で利用した。また、リアルタイムにメールの受信を把握できるよう、本校に設置してあるメールサーバの転送機能を使って、携帯電話へメールの受信通知を設定した。このことにより、真夜中のメールに対しても日中のメールに対しても対応することが可能になった。生徒の前で直接話し合うことなく、また事前に準備などもできるため、きわめて有効な手段となっている。また、本校メールサーバのWebメールサービスを利用すると、データが本校のメールサーバに蓄積されていくというメリットがある。メールの内容に応じて必要があればプリントアウトし、関係者間で検討することも可能である。すでに数十件のメールについて、校内の

関係者間で対応などの検討をする際に活用している。

保護者との情報交換をイントラネット（FirstClass）サーバにアクセスする形態に切り替えていくことも検討したが、クライアントソフトの導入や使用方法の取得という負担が生じるため、保護者側の使い勝手を踏まえて、今回の事例においては形態がより簡単なメールを引き続き利用することにした。保護者側については、通常のメールソフトを利用されている。

昨年度よりイントラネットの手段としてFirstClassサーバを利用した形で取り組んできたが、支援者間の連携・事例の蓄積という観点からみると、校外の支援者が一人に限られる場合、Webメールを活用した今年度の形でも求めていたものが達成されている。昨年度とは違った形態による、特定条件下において有効な支援者間ネットワークと言えるのではないだろうか。

今後は、FirstClassクライアントソフトのマニュアルの作成、支援者の条件により有効と判断される場合の暫定的なWebメールの活用推進など、より柔軟に支援者間ネットワーク構築が進んでいくような手だてを講じていきたい。

3. 研究の成果

本グループの研究において、児童生徒の学習活動や支援者間ネットワークに、情報機器やそのネットワークを活用する可能性や有効性を、実践的に確認することができた。

児童生徒への学習支援に関しては、①情報活用能力の向上、②発達段階に応じた各段階相応の情報教育の学習活動の実践事例の蓄積、③チャレンジキッズにおける電子掲示板のスタイルだからこそ生まれる学びの相互作用、④卒業後を含む学校外からのWebメールの利用などの成果を得た。これらの知識や技能は家庭生活や卒業後のQOLの向上にもつなげていくことができるものである。

支援者間ネットワーク構築に関しては、本校が独自にFirstClassサーバを運用している利点を生かして、アクセス制限を設定した生徒支援用の電子会議室を独自に作成し、運用を開始できた。また、支援者をつなぐネットワークとしてのWebメールの有効性も実践的に確認し、よりネットワークの軽い代替手段として拡がりができた。

～児童生徒の「学習の場」の拡がりを求めて～、～支援者の効果的な連携をめざして～の2つを柱に立ち上がった本グループは、以上のような実践を重ねながらそれぞれの可能性を実証してきた。今後の実践の継続・進展を期待したい。

【参考文献等】

¹ チャレンジキッズ研究会 障害児教育における遠隔協働学習の研究を展開。詳細は次のWebページを参照されたい。

<http://fyw.sue.shiga-u.ac.jp/~chaken/>

² FirstClass 電子会議室システム。詳細は次のWebページを参照されたい。

<http://www.fcm.co.jp/>